２０２４年１月の総評：木下龍也

手の影を生む栞を抜くために／長谷川柊香

「栞を抜く」に直接関係するのは「手」であり、「手の影」はそこに影響を及ぼさない。が、この作品は「手」と「手の影」の主従を逆転させる。さらには「栞を抜くために」「手の影を生む」を倒置することで「栞を抜く」という目的でも「手」を動かすという手段でもなく、「手の影を生む」という行為に主眼を置かせる。この逆転と倒置によって、通常であれば注目しないはずの現象に、否応なく注目させられるのだ。この作品にはっとさせられるのは、我々も子どもの頃はこういうふうに世界を見ていたからではないだろうか。

じんるいの
そんなところにだけある火／まちりこ

あんなやこんな「ところ」にはない「火」とは何かを探っていけば、「そんなところにだけある火」が見えてきそうである。遍在ではなく、偏在している「火」。遠くでも近くでもない「火」。当てはまりそうなひとつは戦争だ。そういった新聞記事とともに載せられた地図を見ると、決して他人事ではないが、まだ自分事でもないそれを「そんなところにだけある火」と思えるかもしれない。初読では天の上の神視点の句かと思ったが、「じんるい」以外の存在から俯瞰すれば、おそらくあんな「ところ」となるはずだ。（我々）「じんるいの」なのだと思う。

黒飴の割れて夜学に迎えくる／杉本太

作者が描いているのは因果関係ではなく、時間の経過だと思うのは、助詞「の」の粘着力が活かされているからだ。「が」ではふたつのシーンを分断しずぎる。２コマ漫画のようにシーンを切り替えるのではなく、主体を映すカメラがゆっくりと教室の外の風景や「迎え」の車に移動していくような映像を読者の頭に浮かべるのであれば、「が」で「黒飴」を中心に置くのではなく、どちらも平坦にする「の」のほうが適切なのだ。そして「の」はシーンだけでなく、色も緩やかに繋ぐ。「飴」の色が溶け出したかのような「夜」の色だ。穏やかで美しい映像だと思う。

布団の角をカバーの中で見失う／佐藤ことみ

これって僕だけの無様なあるあるだと思ってたんですが、あなたもやっていたんですね。洗濯して、乾かして、改めて装着するときに、長方形の「カバー」の長辺の片側のチャックをおろして、「布団」本体を押し込んで、「角」を合わせなければと、自分も「カバー」内部に潜り込んでみるんですが、適当に押し込んだばかりに、本体が「カバー」のなかで二つ折りになってたりするから本当に苦戦するんですよね。このせいで洗濯も億劫になる。自動運転とかより先に「布団」「カバー」の装着を自動にしてほしい。でも、似たような人がいてちょっと安心しました。

神さまが固く絞ったような梅
だからひとりでいるほどきれい／穴棍蛇にひき

「梅」干し、「梅」ジュース、「梅」の木にある開花する前のつぼみ。いずれにせよ主体の前にあるそれには「神さまが固く絞ったような」痕跡がある。「梅」干しならばしわが寄っているのだろうし、「梅」ジュースならば濃い色なのだろうし、つぼみならばほころぶ前の状態だ。いずれにせよ主体はそれを見て、「ひとりでいるほどきれい」と感じている。だれかと共有すれば、自分だけが「神」の痕跡に気付いてるという恍惚感が中和されてしまうからだろう。「ひとり」で感じたことを手放さずに「ひとり」で保つ。今の時代には難しいことだからこそ、美しい。

透明な星に座れば向こうにも
鏡のように少年がいた／azusa

主体は「透明な星」を見ることができて、そこに腰掛けることができる。凡人にはそもそも「透明な星」を見つけることさえできないだろうから、『夏の星座にぶらさがって花火を上から見下ろ』せるくらい特別な能力の持ち主である。が、能力の行使中に、もうひとり似た能力を持った「少年」を見つけたのだ。自分だけではなかったのだ、と知ったとき、主体はどう思うのだろう。残念に思うのか、仲間を見つけたようで嬉しく思うのか。才能のある人物が、ある高みに上り詰めたときに見える景色を幻想的に描いた一首なのではないだろうか。

目には目を口には口をぶつけ合い
闘うように愛をしていた／花野木春

『目には目を歯には歯を』という報復律を下敷きにしながら、おそらく多くの人が通り、通り過ぎる「愛」のかたちを見事に表現している。視線に視線を、くちびるにくちびるを、言葉に言葉を「ぶつけ合い」、まさに一対一の「闘うよう」な激しい「愛」だ。渦中にいるときは夢中で気付けないが、終わってしまえばもう戻ることはできないし、「愛」のかたちがそれだけではないと知ってしまうとなかなかもう一度というふうにはいかないあの衝動。だから「た」なのだ。過去形であることがどうしようもなく切ない。

帰るべき海がきみにも私にも
あってつかのま手を繋ぐだけ／ひろみ

今この「つかのま」にいながら、それぞれの「海」に「帰る」という終わりを知っているために「手を繋ぐ」という接触に喜びがない。どうせそれ「だけ」なんだ、と達観しているようにも解釈できるが、「帰るべき海」がひとつならどうだろう。いずれは互いに身体を失って、魂となり、「海」で溶け合ってひとつになる。

本当の意味でひとつになるという「手を繋ぐ」以上の喜びを知っているから、この「つかのま」では「だけ」しかできない、という寂しさが書かれている、と読むこともできる。「海」や「だけ」をどう読むか。波の上にいるみたいに揺らされる。

薄氷のように小気味よく踏んで
それで私を許してほしい／うろ仔

　いくら言葉で「許」すと伝えたとしても、そこできっぱり「許」すことはないだろう。だれかに「許」すと伝えるときは、「許」し始めるときだからだ。消化はそこから始まって、時間をかけて忘れていくのである。主体はそれを知っているからこそ「薄氷のように小気味よく踏んで」という比喩を使っているのだろう。あんなふうに粉々にされて、それで気持ち良くなってもらって、後腐れなく、と。「ほしい」というのが叶わないというのも知っているはずだ。許されること、そして、許すことの難しさが書かれているように思う。

生きている理由のひとつが
きびなごの酢味噌が好きって、
それでいいかな／マズルカ

　死を意識しない限り、わざわざ「生きている理由」は考えない。「理由」なんてなくていいんだけど、それを考えてしまうときは、なるべく「理由」がたくさんあったほうがいい。あの人と一緒に過ごしたいから、我が子を育てたいから、誰かの役に立ちたいから、恩返しをしたいから。立派な理由から挙がっていくだろうけど、重要なのは善悪でも有益無益でも大小でもなく、並べられることなのだ。もちろん「きびなごの酢味噌が好き」でもいい。日々から落ちてしまいそうなとき、掴める命綱はたくさんあったほうがいいのだ。そんなことを思い出させてくれる歌。

以上です。たくさんのご投稿ありがとうございました。
２月のご投稿も楽しみにしております。

木下龍也